

宮沢賢治のことば × 加古隆の音楽

宮沢賢治は1896年(明治29年)岩手県花巻川口町(現:花巻市)生まれで、37歳の短い生涯を閉じた詩人・童話作家。「農民芸術概論」で思想の基盤をあらわした。童話「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」、妹の死を詩の形にとどめた「永訣の朝」などのことばと加古隆の音楽が結びついたアルバム「KENJI」は1988年に発表され、ピアノ、チェロ、朗読というシンプルな形でステージ化しました。そして「賢治から聴こえる音楽」と題して数年間に渡り全国で公演しましたが、20世紀の終りと共に長く封印されていたのです。今年はこの作品を「加古隆カルテット」+「朗読」という編成にアレンジした、新しいバージョンとなります。宮沢賢治のことばと加古隆の音楽、それぞれの「心象スケッチ」が響き合っ、まさに“あの「風の又三郎」が「永訣の朝」が音楽と結晶してよみがえる”唯一無二のステージです。

美しいものと美しいものが出逢う

宮沢賢治の膨大な作品群から「ことば」を選び出し、初演の朗読を担ったのは、アラン・ドロンなどの声優として活躍していた野沢那智。当時のCDアルバム「KENJI」ブックレット掲載文より(下記)

《作品によせて》美しいものと、美しいものが出会うことほどすばらしいことはないと思います。加古隆さんの音楽と、宮沢賢治氏の文章がひとつになったら、きっと素晴らしく心に響く瞬間が幾つも生み出せるだろうと云うのが、この仕事に関わった、僕のたった一つの動機でした。音楽は見事に成功していると思います。それは、美しさを支える——たとえば、苦悩とか厳しさとか淋しさとか——そうしたものがお二人の間で火花を散らしたからだと思います。宮沢賢治氏の全作品の中から、加古さんが音楽を生み出せる言葉を探すのが苦労でした。あとは、僕の介在が二人の仕事邪魔してなければ、とそれを祈るだけです。

一九八八年十月三十一日、野沢那智



加古隆カルテット



ピアノ(加古隆)、ヴァイオリン(相川麻里子)、ヴィオラ(南かおり)、チェロ(植木昭雄)の4人で2010年に結成され、加古隆の楽曲を演奏するグループ。エイベックスクラシックスからデビューアルバム「QUARTET」と、「QUARTET II」「QUARTET III〜組曲 映像の世紀〜」を発表し、コンサートや映画音楽などの録音で活動し、

2014年の欧州公演も絶賛された。ステージ上の4人の配置は斬新で、古典的な楽器編成に新しい響きと可能性をもたらし、「目にも耳にも美しい」と評されている。

加古隆(作曲家・ピアニスト)

Takashi KAKO

東京藝術大学大学院・パリ国立高等音楽院にて作曲を学び、オリヴィエ・メシアンに師事。パリ在学中に即興ジャズピアニストとしてデビューするという特異な経歴を持つ。ピアノ曲からオーケストラ作品まで幅広く、映画音楽での受賞も多い。NHKスペシャル「映像の世紀」シリーズのテーマ曲「パリは燃えているか」で知られる。演奏する音色の美しさから「ピアノの詩人」とも評されており、最新アルバムは、パリ・デビュー 50周年を記念した自選映像音楽集「KAKO DÉBUT 50」。



相川麻里子(ヴァイオリン) Mariko AIKAWA

東京藝術大学、パリ国立高等音楽院卒。邦人作曲家の新曲演奏や現代音楽、2007年からのliveimageツアーでのイメージ・オーケストラ・コンサートマスターなど、ジャンルにとらわれず幅広く活躍。2022年、第1回グラチア音楽賞特別賞を受賞。



南かおり(ヴィオラ) Kaori MINAMI

京都市立堀川高校音楽科(現、京都堀川音楽高等学校)を経て、東京藝術大学卒業。多数アーティストのレコーディングやコンサートツアーのサポート等で活動。



奥泉貴圭(チェロ) Takayoshi OKUIZUMI

東京芸大附属音高を卒業後、ドイツ・トロツシゲン音楽大学を経て、2007年より2年間バイエルン国立歌劇場の契約団員として研鑽を積む。2006年度文化庁在外研修員。帰国後、2016年まで上野学園大学講師。現在はソロ、オーケストラ客演首席、室内楽奏者、レコーディングなどの活動を行う。

朗読



加古臨王(舞台俳優、声優、演出家) Lion KAKO

玉川大学文学部芸術学科卒。2003年より舞台、テレビなどで活躍。ミュージカル『刀剣乱舞』、『ライブ・スペクタクルNARUTO-ナルト-』など、日本・海外各地の舞台に出演。声優として、アニメ「テニスの王子様」『カードファイター!!ヴァンガードG』『おじゃる丸』など多数出演。

近年は舞台演出家として「終末のワルキューレ」「NIGHT HEAD 2041」「青の炎」『TRACE U』『地獄楽』などを手がける。



加古隆
公式サイト